

【奥の細道】

【】(月日は百代の過客にこと)

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる者は、日々旅にして旅をすみかとする。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず、海浜にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巣をはらいて、やち年も暮れ、春立てる霞の空に白河の関越えんと、そぞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神の招きにあひて、取るもの手につかず、股引の破れをつつり、笠の緒付けかえて、三里に交するより、松島の月まつ心にかかりて、住めるかたは人に譲り、杉風が別墅に移るに、

草の戸も住み替はる代ぞ難の家

表八句を庵の柱に懸け置く。(奥の細道)

問一 「過客」と同じ意味で使われている語を、文章中から抜き出せ。

問二 「古人も多く旅に死せるあり」は、古人に対する作者のどういう気持ちを表しているか。最も適当なものを次の中から選べ。

ア 恐怖    イ 同情    ウ 期待    エ 悲哀    オ 敬慕

問三 「取るもの手につかず」と最も意味の近い慣用句を次の中から選べ。

ア 手玉に取る    イ 途方に暮れる    ウ 手が回らない

エ 矢も盾もたまらない    オ はめを外す

- 問四 の句「草の戸も住み替はる代ぞ難の家」に詠まれている作者の気持ちとして最も適当なものを次の中から選べ。
- ア 風流な草庵も、俗っぽい家になったことだ。
- イ 古びた草庵も、新しい家に建てかえられたことだ。
- ウ わびしい草庵も、はなやいだ家になったことだ。
- エ 静かな草庵も、やかましい家になったことだ。

問五 「ぜひ旅に出たい」という作者の心の状態が最もよく現れてる部分を、文章中から四十字以内で抜き出し、初めと終わりの五文字を書け。

(鳥取県)

「解答」

問一 旅人

問二 才

問三 工

問四 ウ

問五 そぞろ神の〜手につかず